

シェルドンなきロータリー

1929年に世界大恐慌が起こり、1930年には職業奉仕理念の提唱者であるアーサー・フレデリック・シェルドンがロータリーを退会します。この1930年に退会したことを巡って、シェルドンに対して非難を浴びせる声を聞きます。

ポール・ハリスやチェス・ペリーが死ぬまでロータリーに在籍していたことを引き合いにして、なぜ、シェルドンは途中で退会したのかという非難です。

シェルドンの親派としての立場からは、ロータリーの理念の提唱者として、最後までロータリアンでいてほしかったという願望もあると思います。

そこで、シェルドン研究に関する第一人者を自認している私としては、ぜひとも、シェルドンの立場を弁護しておきたいと思います。

シェルドンが入会する前のロータリーは、親睦と物質的相互扶助に明け暮れた平凡な社交クラブの一つにしか過ぎない存在でした。しかし、当時雨後の筍のように設立された数多くの社交クラブは、長続きせず、殆ど姿を消しています。

シェルドンは危機的な局面を迎えつつある資本主義を正常な形に戻すためには、正しい経営学に則った企業経営をする必要があると考えました。そのために考え出した手法が He profits most who serves best のモットーとそれに付随する数々の活動の実践でした。当時の共和党の政策と真っ向から対立する奉仕理念であったため、アナキスト呼ばわりされながらも、活動を続けました。

彼の考え方に共感して、経営方針を転換した人は一様に事業を伸ばしました。当時の年次大会はシェルドンの記念講演なしには開くこと

ができませんでした。

金が溜まりはじめると、贖罪の意味も含めて、チャリティ事業に走る人が現れてきます。中にはボランティア活動に生きがいを見出したグループも現れました。

特に 1914 年に RI 会長を務めたマルホランドは、社会的奉仕活動の実践こそロータリーの役割だと主張して、シェルドンの経営学に基づく奉仕理念とは異なる身体障害児対策をロータリーの対社会的活動に取り入れて熱心に取り組みました。

経営学者としては著名な存在であったシェルドンも、ロータリーの社会では、クラブ会長すら務めたことのない、一介のロータリアンに過ぎません。元 RI 会長の強い影響を受けたボランティア派は、一気にその勢力を伸ばしていきました。

ボランティア活動を現すモットーが次から次へと生まれました。前述の「Service, not self」に続いて「Service before self」などの言葉遊びのようなモットーも出て、結局 1920 年に「He profits most who serves best」と「Service above self」が正式に二つのモットーとして使われることとなります。

この頃から、正しい経営学に基づいて事業を健全に運営しようとして、ロータリー運動に参加しようとする人は徐々に減少し、エリート意識を持ったボランティア活動派としてロータリーに在籍する人が増えてきました。

経営学者としてまた教育者として不動の地位を築いていたシェルドンにとっては、経済界の専門家が一樣に高く評価している Sheldonism の理念について、素人集団に過ぎないロータリーの内部から批判を受けることの方が、不愉快きわまりないことであったと思われる。

シェルドンは 1921 年にエジンバラで開催された年次大会で「ロー

タリー哲学」というスピーチを行ったのを最後に、ロータリーの公式の場からは姿を消し、それ以降はロータリーとは関わりを一切絶って、自らのライフワークである経済人の育成に没頭する道を選びます。

RI もシェルドンの存在を消すことに懸命になっていた模様で、RI が保存する 1921 年以降の記録の中から、シェルドンの名前を見出すことはできません。

1923 年にはこの双方の主張に決着をつける決議 23-34 が採択されますが、ボランティア派にとって大きな収穫は、Service above self に対して「他人のことを思い遣り、他人のために尽くす活動」というお墨付きを得て、双方がロータリーのモットーとして正式に認められたことです。

自分のライフワークとして築きあげてきた経営学に裏打ちされた奉仕理念 He profits most who serves best と、誰がいつ作ったのか、その真意すら分からない Service above self が互角に並んだことは、シェルドンにとって許すことのできない一大事だったに違いありません。

なお、この決議 23-34 が持つ、もう一つの画期的な改革は、従来のロータリアン個人の奉仕活動 (individually) から、条件付きとは言いながらも、団体的な奉仕活動 (collectively) を認めたことです。

2) Primarily, a Rotary club is a group of representative business and professional people who have accepted the Rotary philosophy of service and are seeking:
First, to study collectively the theory of service as the true basis of success and happiness in business and in life; and second, to give, collectively, practical demonstrations of it to themselves and their community; and third, each as an individual, to translate its theory into practice in business and in everyday life; and fourth, individually and collectively, by active precept and example, to stimulate its acceptance both in theory and practice by all non-Rotarians as well as by all Rotarians.

決議 23-34

1927年にオステンドで開催された国際大会で、奉仕活動の実践を容易にするために、Aims & Objects Planに基づいた四大奉仕（後に五大奉仕）が採択されます。

ここで初めて職業奉仕という言葉が使われ、現在に至っているわけですが、これはシェルドンが述べた経営学上の奉仕理念とは似ても似つかぬものであったため、それ以降、職業奉仕とは何か巡って数々の混乱を起こすこととなります。

1987年にRIが発表した「職業奉仕に関する声明」の中の「クラブが行う職業奉仕」という文章を巡って、職業を持っていないロータリークラブがどのようにして職業奉仕をするのかという論争が、いまだに続いています。

職業奉仕の英語名がVocational Serviceであることも、シェルドンにとって屈辱的なものでした。Vocationという表現は職業を天職と考えるイギリスやヨーロッパの考え方であって、シェルドンの修正資本主義に基づいた経営学としての職業感とは全く関係のないものだったからです。

シェルドンの経営学を採用したが故に、ロータリーはここまで発展したのに、何をいまさら天職論を持ち出すのかという心境だったと思われまます。ちなみにシェルドンの文献にはVocational ServiceとかVocationという言葉は一切使われておらず、Profession、Business、Occupationが使われています。

1929年のダラス大会で決定的な事件が起こります。イギリスから出されていたHe profits most who serves bestを廃止しようという決議29-7が、賛成と反対が伯仲して、危うく採択されそうになりました。その賛成票の多くがアメリカからでたことは、シェルドンにとって大きなショックであったことは否定できません

同じ国際大会で、身体障害児童の救済事業をロータリーの最優先課

題として実践することが決定したことによって、ポール・ハリスとの意見対立が決定的になったことも、シェルドンが退会する直接的な動機になったのかも知れません。

彼の最愛の息子、その名も父親と同じアーサー・フレデリック・シェルドンが1929年に30歳の若さで亡くなりました。

その落胆ぶりは如何ほどであったか。その悲しさが、彼の最後の作品となった「奉仕の理念と保全の法則」の中で、死後の世界について書かせた動機になったのではないのでしょうか。

1930年には正式にロータリーを退会します。それを待っていたかのように、1931年にはシェルドン・スクールの卒業生を中心に作られた道徳律が配布禁止になりました。

ここで考えなければならないことは、シェルドンが社会に及ぼした影響力についてです。1921年のロータリアンの数は全世界で僅か7万人に過ぎません。それに対してシェルドン・スクールの卒業生は25万人とされています。

シェルドン・スクールの卒業生名簿にはチェスレー・ペリーやジョン・ナトソン、ジョージ・ピンカム、ロバート・デニーロなどの有名なロータリアンの名前を数多く見ることができます。

平凡な社交クラブに過ぎなかったロータリーに、奉仕理念と数多くの情報を提供して、ここまで育てあげてきたにも関わらず、自我を主張し始めたロータリーにこれ以上自分の力を割く必要はない、それよりも事業の発展のために自分の助けを求めている大勢の人のために尽くすべきだと、シェルドンは考えたのではないのでしょうか。

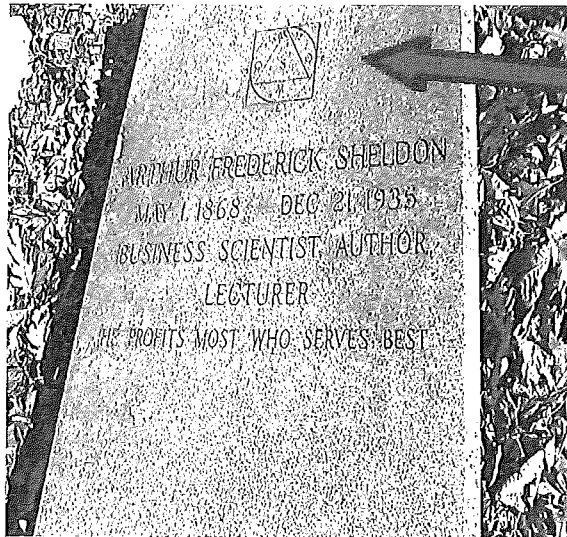
彼のお墓は、アンナ・グリフィス夫人の出生地、ニューヨーク州キングストンにあります。墓標には、インドの哲学者バガバン・ダスの平和学から引用した質・量・管理の状態を表す、価値ある奉仕の要素と、He profits most who serves bestの文字がはっきりと刻み込まれ

ています。

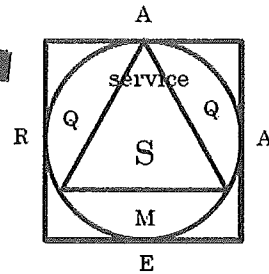
この経営学のモットーは、健全な事業を構築すること、即ち積極的な販売術を実行することによって、奉仕の原則を条件とする継続的に利益をもたらす常連客を作り、それを維持することの重要性を意味しているのです。

質、量、管理状態を表す奉仕の三角形をよく見ると、この三角形は円で囲まれ、更にその周りを四角形で囲んでいることが分かります。

一番外側の四角形の辺に文字が一文字ずつ、刻みこまれており、上



シェルドンの墓標



にA、左にR、下にE、右にAの文字が読み取れます。これはシェルドンが強調した教育論、すなわち領域学を意味します。

A Ability 能力。

R Reliability 信頼性。

E Endurance 忍耐力。

A Action 行動力

この頭文字を組み合わせた、AREA すなわち、真の教育とは、知識を教え込むことではなくて、その人のあらゆる部分の守備範囲を広げ

て、持っている潜在的な能力を引き出すことということになり、シェルドンが信奉していたカントやバガバン・ダスの教育論と一致するわけです。